2022年12月11日（日）主日朝礼拝説教

『受胎告知』井上隆晶牧師
イザヤ書7章13～14節、ルカ福音書1章26～38節

❶【処女降誕とは】

アドヴェントの第三週になりました。今週は受胎告知からお話をしましょう。ナザレという町にいたおとめマリアのもとに天使ガブリエルがやってきてこういいました。「**おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。**」（ルカ1：28）この挨拶を聞いたマリアは戸惑います。するとガブリエルは「**マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名づけなさい。**」（31節）といいます。その時のマリアはまだ15歳くらいだったといいます。マリアはヨセフと婚約していましたが、まだ結婚していませんでしたので「**どうしてそのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに**」というと、ガブリエルは「**聖霊（神）があなたに降り、いと高き方（神）の力があなたを包む。だから生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。**」（1：35）と説明します。
処女が子供を宿すということをキリスト教の用語で「処女懐胎」といいますが、これをどのように考えたらいいのでしょうか。聖霊によって生まれるということは、神によって生まれるということです。**神は誰の力を借りることもなく存在しておられる方ですから、神が人となる時にも、誰の力を借りないで人となることができるのです。人間は救いを必要としており、一方神は、人と共に生き死ぬための体を必要としていました。幼いマリアがそのための身体を提供したのです。**彼女の中で神と人が初めて一体になり、神人キリストが生まれました。マリアはこうして天と地を結ぶ梯子、天国の門となりました。彼女を通って神はこの世に来られたからです。私はこの出来事にものすごい感動を覚えます。詩編に「**曙の胎から若さの露があなたに降る時、主は誓い、思い返されることはない。**」（詩編110：3～4）という言葉があります。口語訳だと「**あなたの若者は朝の胎から出る露のようにあなたにくるであろう。主は誓いを立てて、み心を変えられることはない。**」です。これはメシア誕生の預言です。もう引き返すことは出来ませんが、神はそれを後悔しません。神は人となり、新しい者になられたのです。神様の大きな決心です。

❷【お言葉どおりこの身になりますように】

天使ガブリエルのお告げに対して、マリアはすぐに「**わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身になりますように**」（38節）といって自分の身を献げて行きました。この「**お言葉どおりこの身になりますように**」という言葉は、私たちがふだん祈っている主の祈りの中の「**御心が天で行われるとおり、地でも行われま**

すように」という祈りと同じです。この場合の「地」とは私の事であり、私の上に神様の御心を行ってくださいと祈っているのです。それはまたイエス様がゲッセマネで祈られた「**あなたの御心が行われますように**」（マタイ 26：42）という祈りとも同じです。この祈りはキリスト教にしかないものです。他の宗教ではこのような祈りはしません。

●先日 TV を見ていたら西宮戎神社が予約制にして、既に初詣を始めたと言っていました。年末年始の人数を制限するためです。そこで祈る人たちは「今年も健康が守られ、良い年でありますように」と手を合わせて祈ると思います。「戎様、あなたの御心を教えてください。その通りに従います」と祈る人など聞いたことがありません。日本人は祈りというと「願い事」をすることだと思っています。しかし本当の祈りとは神の思いを聞き、それに自分を無にして従わせてゆく、神に自分を合わせてゆく、これが祈りの実です。

●渡辺和子シスターがこんなことを書いています。「修道誓願と言うのは白紙の一番下に署名をするようなものです。これから先この白紙の上の部分に何を書かれてもかまいませんというものなのです。」

でも献身というのは楽ではありません。神のみ心は時として厳しいものだからです。投げ出したくなること、従いたくないことも言われるからです。だからこのマリアの言葉は十字架の匂いがします。実際マリアはこの後、過酷な運命を負わされることになります。次から次へと理解できないことが起こり、最後は最愛の息子の十字架刑です。心が剣で裂かれるような思いをします。私のマリアに対するイメージは、美しく清い聖母というものではなく、忍耐強い母のイメージなのです。なぜこんな目に遭わなければならないのか、と思うこともあったでしょう。処女が子供を産むなんて、他人に言っても誰も理解してくれなかったと思います。誰にも言えない悲しみや苦しみを抱えて、それらを「**心に納め、思い巡らしながら**」ひたすら従い続けた平凡な人だと思うのです。渡辺和子シスターが「若い時に考えていた勇気は、新しいことにチャレンジし、何かを成し遂げる勇気でした。しかし歳をとってくると、受け入れがたいものを受け入れてゆく勇気というものが必要であることを教えられています。」といっていますが、献身とはそのようなことなのです。

❸【神と共に歩むために、あなたは神から召し出された】

この出来事はマリアに対する「神様の道具になりなさい」という「召し出し」でした。彼女の人生の中に神様が入って来られたのです。これはマリアだけではありません。ノアも、アブラハムも、モーセも、イザヤも十二弟子たちも、ある日突然、神様が彼らの人生の中に入って来られ、彼らを呼ばれたのです。神が私たちを呼ばれるのは、私たちの助けがなければ救いを成し遂げられないからではありません。神の救いを見させ、私たちをその証人にするため、また私たちに栄光を与えるためです。光栄あるプログラムに参加できた人は、人生の中でその仕事

に出会えたこと、それに参加できたことを誇りに思うものです。皆さんも神様に呼ばれた（コーリング）のです。クリスチャンになるというのは栄光ある仕事に呼び出されたということなのです。
カトリック教会ではマリアの純粋性とか清さということを主張しますが、正教会ではキリストを宿し、産んだ女として「**生神女**」（テオトコス）という称号によって尊敬します。イコンに描く時も、マリアだけで描いてはならず、キリストと共に描かなければならないと定めています。**マリアのすばらしさは、神の道具になったということです。**祈祷書を唱えていると、「ああ、キリストを宿すという大きな仕事をしてくださって本当にご苦労様でした」と思うのです。マリアだけでなく天にいる多くの聖徒たちもキリストのために、自分の人生を献げていかれました。あなたもキリストの仕事をしなさいと呼ばれているのです。
最後に「**おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。**」という天使の言葉にもう一度目を留めてみましょう。天使は二回「恵み」という言葉をいいました。恵みとは「主イエスが共にいる」ということなのです。本当に主はマリアの胎内に入りマリアと共にいましたし、キリストを産んでからも、マリアは主と共に歩んだのです。**神と共に歩むことが恵みなのです。なぜなら自分に限界が来ても、神にはいつも限界はないからです。**「神様が共にいればきっと何とかなる、きっと何かすばらしいことが起るにちがいない」と、神様にいつも希望をもつことができるからです。逃げても神と一緒、貧しくても神と一緒、病んでも神と一緒、死んでも神と一緒です。神が一緒という感覚をもっと感じるべきです。

●聖ルカ国際病院の名誉院長であった日野原重明医師は、牧師であった父親のことをこう書いています。『父は息子の私から見ても、なかなかやるなと思わせる行動の人でした。「何でも他人の倍やれ」「思いついたら明日ではなく、いますぐやれ」と父はいつも言いました。「小さな円を描いて満足するより、大きな円の、その一部分である弧になれ」と好きだった英国の宗教詩人ブラウニングの詩を引用して、父が教会の信者に向けて説教したのは、私が中学 1 年のとき。自分に向けて言われたことばのように胸に残りました。大きなビジョンというものは、その時点では先取りしているわけですから、なかなか人に理解されません。それでも果敢に挑戦すれば、自分が生きているあいだは未完で終わっても、誰かがそのビジョンを引き継いで、いつの日にか大きな円を完成させてくれる。というのです。』

小さな円というのは、その人個人の歩みでしょう。大きな円というのは神の歩み、キリストの歩みでしょう。個人で勝手に良かれと思う歩みをするのもいいですが、それよりキリストの歩みを共に歩んだ方がすばらしい人生になるのです。大きな円の一部の弧（Isolated part of a Large circle）は、大きな円と重なっているのです。あなたもこの円に招かれたのです。神と共に歩みましょう。何とも心強い旅ではないでしょうか。